

武家名目抄 職名部 五十九

四五六	二五二〇六	和書門
中四九	七七六	類
冊	架函號	

庫	文	閣	内
一五三函	二五二〇六	和書	
一〇架	四五天冊	類	

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (60)
函號	153 275



物見番頭

大物見

物見豆輕

忍物見又稱物見

物見番

小物見

遠物見又稱遠見

武家名目抄第五十九冊

職名部世四中

物見番頭

物見番

太平記云四條繩手楠帶刀正行舍弟正時

和田新兵衛高家舍弟新発意賢秀究意竟ノ

兵三千餘騎ヲ率シテ霞隱レヨリ葛直ニ

四條繩手ハ押寄セ先年候ノ敵ヲ懸散サ

ハ大将師直ニ寄合テ勝負ヲ決セサラニ
ヤト少モ擬議セス進タリ世よりお見事な
かゝる者なきものありしとありしとありしとありしと
もゝゝゝ歌は動静をあるも兵士をとりつるべきも
願ふは
ものみ
又云吉野御廟南方ノ皇居ハ金剛山ノ奥
観心寺ト云深山ナレハ左右ナク敵ノ可
近所ナラ子共在候ノ御警固ニ憑思召レ
タル龍泉赤坂モ責落サレ又昨日一昨日

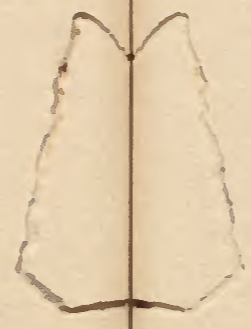
コテ御方セエ兵共今日ハ多少御敵ト成
スト聞エシカハ云々按在候の法言固とく
要害
東亂記云小弓義明夜已ニ明ケレハ小田
原勢州川端ニ打望ム小弓勢ノ先陣推津村
上堀江鹿嶋以下川端ニヒカヘテ待懸夕
リニカ物見ノ兵ヲ御旗本ハ参ラセテ申
ケルハ敵已ニ川ヲ越候其勢雲霞ノ如シ

味方ノ御勢ニテ帝ノ如クニ對ヤウノ御
合戦叶ヘカラス只今急ニ御旗ヲ動シ川
中ニ勝負ヲ決スルカ味方引ヤウニモテ
ナシ敵ノ先陣半越オシ時急ニトリヒシ
キ川ヘ押ハメ候ハニ必御味方ノ勝ナル
ヘシト委細ニ申遣ケレハ諸軍此後可然
ト云

新田老談記云越後謙信公成田城ヲモ水

攻ニ可被成トテ御用意ノアルヲ左衛門
聞及テ早速和談ヲ願給フ略佐野桐生ノ
道筋山ノ内御見物ノタメ廣澤境野ノ原
ヲ御通り且利ハ幡ヲ御通り也細道無奈
内故ニ左右ノ山ノ腰田畑ヲフニ狼藉無
限其砌茶臼山寄居物見ノ番頭ニハ金井
田左衛門ト云者在番ニテ居タリケルカ
謙信公ノ御通りヲ聞テ雨沿ノ邊ヘ出向

テ遠見ニテ居タルケル
又云且利佐賀^野桐生トハ領分入組多ク四
五年以前ハ境論秣論起テ夏ハ諸苗ヲ踏
散ニ作毛ヲ振散ス依テ国主代官ノ下知
ヲ不待就夫境目繁昌ノ村里ニハ寄居ヲ
搆テ出城ヲ持物見番ノ侍ヲ遣ニ置歩弓
ノ人ヲ相添近邊ノ百姓集リ居テ濫妨狼
藉ヲ防キケリ



北代五代記云^{お見の武老}敵味才對陣の時ニ
至^してお見さまは^は人々先^に山^に馬^を鍛^じ
練^して^お見^の事^力を^志す^て即^ち素^をま^りて^お見^の
の武老境自^らあ^らせ^しま^るの^事丸^をさ^らん^合を^けり
ひ^とも^あら^せま^る事^所に^あら^せ上^敵の^軍旗^をさ^らん^事
き海^陣と^いふ^れも^方が^軍由^馬に^對陣^をす^る時
り敵^も味^もし^も老^の後^に一^つあ^らせ^しま^る事^所
境^の一^部を^取り^て敵^城の^前に^あら^せす^る事^所

遣二人衆返テ如右申ス
甲陽軍鑑末書云武者奉行或一人旗奉行
二人長柄奉行二人何レノ備ニモアルヘ
之旗本ノ相言萬法度ヲ請テ其手ノ觸流
ヲ十ニ隔番ニシテ非番ハ物見ニ出ル也
又云廣瀬其日物見番ニアタリ馬上ニテ
酒井左衛門尉ト三度ノ内二度詞ヲ合追
コト追出其時三科小管孕石曲洲辻彌兵

衛和田加介長坂十左エ門此ハ人馬ヨリ
方リタチ高名仕ル也

又云十二月廿二日ニ濱松味方今原迄推
詰被成諸將ニ向テ被仰家ハ勇智ノ將
也ニカルニ其居城近ク推詰事是一ツノ
規模ナラスヤ刺信長大軍ヲ以テ加勢ヲ
十ス中旗本ノ物見番諸我入道是ヲ見定
ム家ハ九備ニシテ只一重也ニカモ旗

色清メリ加勢ノ備ハ旗濁リテ敗軍ノ色
明白也

別所長治記云秀吉不及辭退天正六年三
月四日為西国成敗都ヲ立同月七日播州
加須屋カ館ヲ為本陣行列ノ次第尽善尽
美一番旗ニ鐵炮三弓四長柄鑓五切具五
各二行ニ列ス前後騎兵相隨之次兵鼓次
軍監次乘替馬次秀吉手廻ノ兵具如先次

螺次小符次手明ノ出歩卒大將秀吉先鐵炮
弓鏡甲立後小旗次宿老次使役人廿八次弁
候ノ役人人卅六次摠勢七千五百騎引下リ
家老一頭翌日ヨリ国中ノ諸侍令出仕或
時山城守三宅治忠兩人軍評定ノ為行秀
吉館ケルニ秀吉ノ曰ク長治西国ノ可有
案内者各ノ軍立ノ次第不日ニ擒敵スル
謀計モヤアルト被問ケレハ三宅申テ曰

ク今度ノ御合戦、万死一生ノ合戦五度
モ十度モナクテハ叶マシキカ御手間ト
ラレ候ハニト存ル就其先手陣ノ張ヤウ
当家代々定メ置所ハ敵国ノ境内ニ入テ
ヨリ備押路ノ程三十里ノ外不押卯ノ刻
ヨリ以前ニ不出未刻ノ首ニ陣取ヲ定然
ニテ物見ノ者ヲ放遣夜懸ノ用心伏兵ヲ
置至日暮備押候ハハ陣ヤ不定晩食不調

士卒困勞ニテ其陣不堅固卅里ハ上道五
里也サテ陣ヲ取固クル事ハ略川端ニ陣
ヲ張時ハ雨降洪水出ニト前廉ヨリ覚悟
ニ山野林古屋敷ニハ必有伏兵ト心得風
ノ順逆可知事肝要ナリ其上遠候中候陣
中ノ候トテ三段アリ遠候ハ敵国癸向ノ
時三日先立テ輕歩ノ遊士ヲ遠候ニ放遣
敵國ハ可入地形切所峻易并敵出向ニト

欲スルカ敵ノ虚實空隙ヲ能ク窺ヒシ
ムコレヲ遠物見ト云摠テ常ニ諸国遊士
ノ間牒ヲ放遣敵ノ虚實ヲ見セテ國ノ政
ヲ可知事肝要ナリ是興軍最初ノ謀也中
候ハ癸向之刻一日先立テ輕騎ヲ三人放
遣道路ノ峻易山林川澤水草ノ便宜ヲ能
能見セシム陣中ノ候トハ存候番ノ者三
人交三番ニシテ其内老功ノ武者一人若

壯利才ノ武者二人合三人交ナリ如此ノ
事憚入候ヘトモ備ノ次第依御尋申候也
清正記云公法正秀吉其ま太の首尾秀吉公
具よ才一のま事しつ自のれ道帝のま者是
操よしなししのれ役もし立つすと思ひし小能
も仕つく也ならましこぶスのか恩ありし木
村大膳の小あ見後ノ仰付らましし御方也
はりのありし御方也
按木村大膳のあ見
の御方也

信長記云條信忠卿高遠攻信忠卿母衣ノ衆
物見ノ者計被_レ召具仁科五郎カ楯籠タル
高遠城川ヲ隔テ高山へ乘上城中ノ様子
被見及

方岡記云越中国多戦利家ノ弟ノ志森城
ノ在_レ一カ作_レカ四ノ乱入キ_レ由城少_レ守_レト
一々本栗_レ寄_レ道ヨリ_レ旗_レ立_レお_レ少_レク
皆の始_レと_レ思_レ一_レ体_レ一_レ受_レ一_レ佐_レ一_レお_レ見_レ一_レ騎_レ云

之六ノ志森_レ一_レカ作_レ一_レ駈_レ海_レ多_レが_レ一_レと_レ告_レ一_レト
一_レ非_レ物_レら_レ一_レ才_レ勢_レ着_レ一_レ持_レ者_レ一_レと_レお_レり_レ一_レ由_レ死
助_レ一_レ木_レ取_レの_レ城_レ一_レ引_レ入_レ一_レと_レ申_レ也
之云_レ陣_レ縹_レ秀吉公_レ一_レ獄_レ長_レ師_レ一_レ即_レ在_レ東_レノ_レ尉_レ要
害_レ一_レ至_レ一_レ矢_レ陣_レ者_レ一_レの_レ一_レ聖_レ百_レお_レ見_レ持_レ馬上_レ一_レ人
計_レ被_レ召_レ連_レ一_レの_レ一_レ志_レや_レ一_レ持_レ城_レ外_レ見_レ事_レ一_レの_レ事_レ一_レよ
法_レ本_レ生_レ茂_レ一_レの_レ一_レ審_レ時_レ通_レ一_レの_レ一_レ地_レ一_レ利_レ出_レの_レ一_レ者_レ
一_レと_レみ_レえ_レ一_レと_レ存

播州佐用軍記云 秀吉公与宇兼テ国中并
国堺毎ニ物見ノ輕騎ノ侍謀士餘多出置
レ国ニ逆心ノ者アルカ他国ヨリ後詰ア
ラハ告来レト付置レケル

松平記之法才も石川又四郎根来十内布
抱孫左衛門お見小も邊へ出ふる勢カ其人
然ノ敵才もも針邊の眞不ノ伏兵城多々存
よお人衆もも力合了き合知毛

増補家忠日記云 天正十三年^年閏八月三日
寄手ノ軍勢九子ノ城ニ兵ヲ発ニテ筑摩
川ヲ渡テ八重原ニ陣ス 略夫ヨリ後ハ敵
味方戦ヲ止テ互ニ城ヲ守リ陣ヲ整テ數
日ヲ経ル寄手ノ軍勢物見ノ番ヲ定テ交
交ニ是ヲ守ル
伊達成實記云 本營ハ可^レ為^レ籠城候間其支
度可^レ申由被^レ申候ヘトモ俄事ニテ心懸モ

不罷成十八日未明ニ本宮へ入候處ニ御
不参候物見ヲ遣候カト兼候へハ夜ノ内
ヨリ付置申候由被申候火ヲ見エ候間陣
移カト存候へハ物見早馬ニテ冬候佐竹
會津岩城衆被引除候結句前田澤モ引除
候由申候間前田津^澤ハ人ヲツカハシ見ヒ
候へハ一人モ不残引上候ニ付政宗公本
宮へ移^御ナサレ御仕置被仰付候

蘆名家記云米澤正宗槍原越槍原ヲ正宗
ヨリ攻玉へトモ穴澤善右衛門尉ツナキ
峠ニ物見ヲ差置正宗寄玉へハ見下シニ
鐵炮ヲウタセ用心キヒシク仕リニ故左
右ナクウタ槍原ヲ攻取玉ノ事不可
奥羽永慶軍記云^{大崎}論大崎義宣郎
等千枝隼人ト葛主税ヲ物見ニ出ス兩人
立飯レハ義宣敵方ノ先手ハ誰ナルヲ人

数ハイカホトカマ^リニト問フ千枝申ケ
ルハ云々義宣忽怒テ汝左ヤウノフカク
モノトハ知ラテ今日物見ニ出ニタリ以
後ハ物見ノ役叶フマニ云々
蒲生氏郷記云岩酌ト云城ニ熊谷越中ト
申者人数多楯籠氏郷此ヲサハニ居ル夏
ヲ無念ニ被存岩酌ニ近ヨリ見渡ニテ如
何思ハレケニ物見二人被指越吉田兵助

周防長丞ナリ岩酌麓在ニ人有乏カ又
ハイツ麓ノ者共退候カト能見ヨト有之
二人麓ヲ見マハルニ人一人モナシ
武彦業話云小田原陣の初蒲生氏郷の攻めハ
岩榎の城ヲ大田十郎氏房が口なるま五月三
日ヲお氏房が表討取る處より下知事より云々
お先より門口より出ると日御お見境兵所
町よりお事つくりとより遊則立出ると事しつる

引込

武徳大成記云小田原陣條天正十八年二月秀

吉小田原ヲ攻ラルニヨリテ神君十三

条ノ軍法ヲ定ラレ諸將ニ令之玉フ一無

下知而先手ヲ差越物見ニ遣儀可為曲事

云々

義殘後賞云朝鮮懸ル躍正月元日ノ未明ニ

毛利宰相秀元ノ御本陣へ太鼓鐘ニテ寄

懸ル間近ク聞ユ元日ノ事ナレハ上下ト

モニ静リ歸テ朝鮮ノ儀式ヲ勤ル所ニ敵

カ寄候ト申程コソアリケレ大將軍聞召

テ物見ノ役者急キ見ヨトノ御諚ナリ打

立テ駒ニ鞭ヲスニメテ見ケルニ獅子頭

赤頭色ニノ面杯ヲ被リ異形異類ノ美麗

ナル出立ニテ旗印笠ホホ杯ヲ差セテニ

三千太鼓鐘笙篳篥ニテ来ル程ニ是何者

ソト云ハ通詞出テ年頭、御礼ニ大將軍
ハ躍ヲ懸奉ルト申急キ立リ歸テ此旨申
上云ハ

東遷基業云利長長重利長御方ニ事ヲ於
テ此一義をびテ粟津ト云秘苑の馬も亦
ト本御の事ハ五付テ山崎長門高山南村
ト鐘君ト引返ト長重死つなきおと利長
の出る事ト告ぐおまじと長重も亦ハ少ねと出ぐ

南浅井迄至リテ陣を布ルおはせりお見
事此速なる心とぬきふらぬあかりとて後御の事
り

松原自休手録云慶長五年八月廿二日押
寄川岸如案從歧阜出勢防之一柳ハ近邊
ノ在黑田常ニ知浅深不恐木曾川逆浪涉
之池田浅野堀尾並纏乘入敵魚支之不肩
城主信誘闇魔堂へ出張ニテ以存候令下知

九月十五日内府曉出赤坂被陣野上卜関
原ノ中途朝霧深シテ不見分敵味方ノ差
別卯刻正則為存候遣澤井左衛門尉森勘
解由祖父江法齋乘還テ内府へ以法齋三
成以下從大垣今曉出関原早ク一戦ヲ可
遂急キ可被出御馬云々十九年十一月九
日大坂勢置番船守神崎ノ渡金吾力勢追
拂之舎兄武藏守出張シテ金吾力聞越神

崎大ニ怒欲越中嶋ノ瀬兼テ遣存候探知
之率兵至中嶋
駿府記云慶長十九年十一月三日及昏黒
御使番島弥左衛門本多藤四郎天王寺口
先手物見被遣處則歸參言上之趣道明寺
近所小山邊藤堂和泉守從其次第陣之躰
申上

秀頼事記云

志岐野
合戦

慶長十九年十一月廿

六日佐久間河内守小栗又右衛門尉物見
ヨリ歸参ミテ今朝敵青屋口ヨリ且輕ヲ
出ニ候處ヲ佐竹義宣取合數刻戦ヒ頸ハ
討捕候ト申廿七日千賀孫兵衛物見ヨリ
歸穢多新家村其邊六ヶ所舟搦ヲ渡蜂須
賀九鬼戸川肥後守等カ諸勢往還自由ヲ
得タリト申又同日永井右近水野日向堀
丹後守菅沼左近山岡主計物見ヨリ歸リ

テ敵七八千野田福島ニ出テ見エ候ト申
不明日御覽有ヘキノ條供奉ノ兵百騎計
申付ヨト被仰出
無名雜話云物見ニ行テ歸主人へ御返事
申ニ夕トヘハ敵進色ナリ或ハ不進色ナ
リト云主人如何ト云答曰敵備シラケ夕
ルトカ又ハ二ノ手不續ト云カ先手進ト
モ二ノ手不進ト云カ御返事餘ハ順之可

申上也其時大將歎味方ノ間何程アラ
ト問或ハ先手ト先手ノ間十五町トカ
町トカアラント云シラケタルニテモ不
續ニテモナシ又問五七町モ有之ト云是
又シラケタルニテモアランカ何モ心付
ヘキ事共ナリ

按物見番乃職を凡我陣ノ際先方時歎の
形概と察察して言を以首筋小結

或は戰場ノ險阻要害等をも色うかめし
其書勢形を依る言後者を行して物
見しつへ言 あはすしし 兵候も わけは本文
兵候とのうらみみる 此職常小段けを多し
之阿重又臨時ノ命も 阿重 阿重
軍法ノ工夫ノ長き者を用ふ事ハ
以慶長元和の比も大し使番月詔
輩これ事を受け流るる事ハ

の望みは敵とてなりて堪へぬ者を用ふ
きては行ふ處に或は敵地は遠きを去り
へきゆり國界の要塞は構へて軍士を結
あして古清や一ひかきもあつた
つふおれ亦敵の動靜をうりゆき
音を聴きしきつうふおきとけり又陣法
并候備とつふありしれとてなす
軍は敵ありし首將乃隊伍は多し

一隊はなりし或は軍小は
進み或は侍をの地し陣して敵軍は形
勢をたしむ其状は志し久し橋をたし
むのありし尚ほありし軍陣は
辨き

大物見

甲陽軍鑑云 長野信濃板垣 板垣浅利右侍は
小旗ありけり 板垣信等條 是れ大將の原

兵濃城指浜村上方へ働河り板垣家仲忠
侍へ中騎歩者一人もうへも大ゆきしり
大よ兵敵陣をくふりえくゆへり中知寺に
同末書云天又十七年七月朔日ニ小縣ヲ
御立アリテ笛吹峠ヲ越シ松枝ノ城へ大
物見ヲ力ケラレ燒働十サレ七月三日ニ
早々引取同六日ニ甲府へ御著也
又云信玄公二萬三千ノ御人數二十一備

ニシカハラカイへ推出シ合戦ヲ持テ立
ラレ馬場山縣小幡真田小山田内藤朝比
奈岡部原其外侍大將老若共ニ召連ラレ
上下百四五十騎餘味方摠軍ヲ五町程出
大物見被成是非一戦ヲトケ氏政ヲ討取
明後日ハ必小田原入ト被仰付
松隣夜話云矢倉ニアリケル侍小田力役
所ニ来リ刀根川ノ方ヨリ馬煙霧ヲ見工

トヨミテ次第ニ相近キ候氏康公奥筋へ
御手使候ヤト申ス小田無覺束テ長野ヲ
伴ヒ矢倉ニ上リ見之而將刀根川ニ坐ス
軍門ノ前ヲ押通り歎ノ可寄様ナシ近國
ニハ輝虎ト太田十ラテ歎ハナシ若又謙
信誤テ奥筋へ手使被申トモ兩將斯テマ
シマセハ争カ一戰不有去ニテモ又味方
ニテハ可有トモ不覺大物見ヲ掛ヨトテ

小田小三郎与力同心五十騎ヲ連レ自ラ
物見ニ出七八町西ニ當ル丸山峠へ衆上
ケル處ニ太田三樂先將流谷カ一手三百
計ニテ寄来ケルニ嶮キ山ノ嶺ヲツラ突
程ニ行逢タリ
關八州古戰録云上杉景虎武景虎大物見
トシテ騎馬少々召連大手佐間ヨリ下
忍口マテ衆廻シ巡見セラレケル

奥羽永慶軍記云佐竹与伊達會津長沼ノ
城主新國上總申ケルハ云々義重宣ヒ
ケルハ御邊大物見ニ出テ番手ノ次第ヲ
モ窺フヘシト宣ヘハ貞道畏リ候トテ馬
上五騎足輕歩者百餘人歩列郡山ノ南ヨ
リ北ノ取出ノ要害窪田ノ矢羅井ノ中ヲ
歎陣近ク打テ通ル
鳥居家業云天正二年九月武田勝頼遠方

濱招ニ働ヒトキ格現極天龍川の極子直虎者
直虎とシ卅餘計百餘名を以テ大物見ノ中ノ最モ
先志名列ノ七以傳致一古事
東遷基業云武田勝頼天龍川大小ノ水漲キ
洩不事不計猪狩見付ハ府々々逃ク河上ニ
陣トテ濱松ノ士多指元忠大久保忠世等々
忠信成瀬正一内友河成密田康忠榊原康政等ニ
十騎斗大物見ノ出テ家ノ甲軍板垣某ノ初云云

河を渡らん〜河濱松の大木見河ふ
入多逆撃んと〜ける右敵涉事相〜
〜陣〜向〜う〜い〜

又云長湫合秀吉中軍小將〜初合十
二万六千人敵少〜三月廿七日午の刻ふ
大豆戸川を渡り大木入〜同日未
乃刻ふ秀吉徳大将と引連〜大木見〜出

河ふ〜名がれ地〜と見え〜八景河野黒
梅印〜小牧山〜向〜岩と築き二重壘を
鑿り出れを二重壘〜垣筑〜柵列
あり

續武家伝法云三月十九日午の刻秀吉公兵進江
中納言殿陣の先きてふ箱根山中城出九八
町計有馬を馬よふ〜越き武所〜西
谷越〜人殺を〜中城の大將松田義清

大吏間官を前と後繋ぐ二人首を打た
ずぬ折うのさく城品時了處ふりハ
小田原より山上に集る飯沼民部左衛門と存
候とて山中へきと不又佐川表此法人根案内
おと弟くを國左衛門と名に元山中
樵吏の通路者不を一語亦又押せり限り
をよ来る言解本乃百岩乃陰軍現と云
夥し又南方日令方よりハ上方既深溪を隔

事險阻をより登れ群雲霞のさく山中集
る歌子山中の城は折く今春小田原へ押
入ると云えり急き降く告んて中途より
走馬の言既三十騎計あり
會津陣物語云 本莊出羽守と政 折節宇佐
美民部小瀬美作ハ五十騎ニテ大物見ニ
出ケル力是ヲ見テ森ヲカタトリ備ヲ立
テ鑿炮ヲ抄縣夕リ

按大物見れ多く云士をひひめく作候を
このありあり大れ字をしようへはか例
乃お見えといふ五騎七騎とて敵母人知是
ふかをひひめめらしてあましはま、敵陣を
進みく、ま屏部を察し、或は敵地を
作候候ありといふかきと人好あくして河原
うかきと右軍士ととくらあか、
又首おしとくううう大物とあつてしめ

とちうこにお見功者あり輩にま士とらう
まをひひめめらあひあう、
何とてあつてあつていふ固まう、

小物見

清正記云 清正実言 のお時長候れ町人取へ人
沢のやまをとまらう、
さう、
言はれし時なりとあひひめ町人取へま切

室町日記云 細川典厩乃要害 四月廿六日戌の

刻 今里上子の原に 梅根中乃傳を六才

く 武子四女百代傳をとりて 今里上子の原に

如法 一おえの里 野中 孝理

甲陽軍鑑云 長野信徳板 梅根中乃傳を六才

梅根中乃傳を六才 大おえの原に 如何と云

陣面く 采女と云ふ 梅根中乃傳を六才

へ 采女と云ふ 即ち 梅根中乃傳を六才

里 野中 孝理

會津陣物語云 一揆勢圍越後 堀雅樂助大

二 憤り五里隔て高山要害ニ 陣ヲ取本莊

ノ村上周防守ト柴田ノ溝口伯耆守ト兩

所へ加勢ヲ乞タリケルヲ有坂齋宮介下

知シテ物見足輕ヲ出シ置雅樂介力使ノ

者二人マテ生捕

梅根中乃傳を六才 野中 孝理

小澤甚家 梅根中乃傳を六才 野中 孝理

のちと煙同心中百小若の類そのれ騎る
きと海よりおん役小若より代と心より
今これ彼目附申百目附少人目附あより
くひ大しと志ある高きと徳学と例より
物と番より号ありと心より代と心より
小若は使字の遣はし或は騎馬よりおん役
一頭と歩立の若を用ひて騎るあより
きりきりしと心より代と心より

遠物見 又稱遠見番遠目

矢島十二頭記云永祿三年五月中旬矢島
五郎及洲沃より城へ寄りて城中より若
りきりしと心より代と心より
目より若師来くみ所及ふと仁有保大智
及旗と見乞と禱と例より大勢あるを
海より後諸小若より代と心より
よ由中より車引より

梅奥好永慶軍記より
世中を載く遠目志

之遠候
小遠候

又云永祿三年龍澤(五府及押免)古成方
中五石之段(市場)百姓(運送)七
妨(一)夜(小)人(女)友(年)一(思)
天正二年六月中旬龍澤(押免)上條
一日運(五)石(龍)澤(古)目(古)河(古)水(古)友(古)平
如仁(賀)保(護)後(條)一(七)横(長)山(城)第(地)五(百)石
有人(大)將(一)一(七)方(鏡)押(免)為(古)由(古)

見聞雜錄云元龜三年極月廿二日朝(古)口
方(陸)函(古)中(古)使(陸)陵(古)平(古)具(古)武(古)者(古)汗(古)出(古)
位(古)也(古)武(古)河(古)信(古)玄(古)武(古)後(古)條(古)不(古)斜(古)中(古)略(古)今(古)日(古)濱(古)松(古)表(古)
以(古)命(古)我(古)之(古)作(古)所(古)一(古)處(古)遠(古)由(古)之(古)方(古)河(古)名(古)家(古)
濱(古)松(古)一(古)城(古)之(古)拂(古)一(古)之(古)向(古)一(古)中(古)河(古)法(古)仕(古)定(古)
味(古)方(古)原(古)一(古)於(古)防(古)戰(古)と(古)古(古)之(古)先(古)比(古)の(古)
扱(古)處(古)也(古)

別所長治記云遠候中候陣中候卜于三段

アリ遠候ハ敵國發向ノ時三日先立テ輕
歩ノ遊士ヲ遠候ニ放遣敵國へ可入地形
切所險易并敵出向シト欲ルカ敵ノ虚實
空隙ヲ能ク窺ヒセシムコレヲ遠物見ト
云今文抄見事
の條に載
新田老談記云武藏國寄居ノ城ニハ北條
安房守ヲ指置シカト無心許事多シトテ
三百餘騎ノ加勢ヲ遣シ櫻澤八幡宮ノ前

ニ新關ヲスヘ山ノ上ニハ遠見ノ番ヲ催
シ用心嚴ク見エタリ
又云天正六年五月二日ニ里見兄弟上下
廿三人石原カ住宅へ押寄撫切セント被
成ケレトモ里見兄弟近隣ニ御座アルヲ
知テ兼テ用心ヲ構テ朝夕遠見番ヲナキ
タリケン今立ル様子ニテ人一人モ無落
去ケレハ無カコリ被歸ケレ

又云新田足利ノ強力若侍ヲ交テ少モ心
ヲ不免遠見加番ヲシテ前後左右ヲ取巻
テ近邊ノ郷人迄ヒシメキケリ
太閤記云城中国多城佐ノ内務助加判表
働ノ功ヲ宗大圖度ノ功遂キ一ノ功
昨日来リ功不疾事ヲ悔一ノ功ヲ功中
にヒイノ新田方より百者を入内評ニシテ
一ノ功ヤ功ノ疑ハ又ハ功を功ノ功

後志狀不知一申此彼後悔一貞後立
以上ト加賀國ノ礼入一在ニテ一殺大
殺向一云々
又云織田造酒坐造酒坐表ニ在ク一此ノ
一ノ功云々一申編ニ初辱故一申一忠
軍中此忠志ナリ一忠伏賊ニ取テ一更ニ
困一此忠志代ノ取番他ノ忠見テ一自
分ノ功ト云々一忠志軍一己獨の功一云々

いふやー也光をかさめ家勇士といひし也
播州佐用軍記云寄手惣勢上月表城ハ遙
ニ見上ル山城ニテ要害ノ地ナレハ是ヲ
事トモセス遠物見ヲ置寄手ノ急ヲ見テ
ハ歩出或鑊炮ヲ打或遠矢ヲ射カケル間
寄手ハ日々ニ手負死人多ケレハ竹把ノ
陰ニ隠レハカク敷イクサハ無リケリ
初井日記云黒井表明智右馬允ヲハ又太

郎トノ馬上ニテ切テ落サセ首ヲトラセ
ラレ候翌日ヘムケテ山ヲツタセ谷ヲ又
ケテムレミニ方クノ口ニヘニケカミ
リ行ク遠ミノ者トモ相ツノ貝吹ハヨリ
合ニ討捨生捕候ホトニ云ク
奥羽永慶軍記云阿子島高辰ノ一天ヨリ
軍始リ未ノ刻ニ落城ス西一方ヲハ態不
圍明置テ落ル者アルカト遠目付ヲ置ケ

レトモ一人モ落ル者コソ無リケレ
又云九戸左近將監梯引河内守モ其夜同
時ニ管米地ノ城ニ取懸散ルニ攻ニケリ
サレトモ管米地因幡守日來用心稠ク四
方ノ櫓ニ遠物見ヲ置ケレハ人馬ノ音續
松ヲ見付ヒシトト出立テ夜討寄ルト
等ノ衝テ出
荒山合戦記云石動山ノ衆徒共ハ當山榮

久ノ護摩并利家調伏ノ祈禱レテ緩ト
シテ居タリケレハ遠見ノ兵ヲモ不出故
ニ利家ノ軍兵共安ト山マテ攻上云々
清正死云清正陣死ハたん 朝鮮軍ハ河津先也
申之機一あり又たらん人一万弱ト云々
左敵をう代古らさけ一文字又かろく家
うをえの考うう源をよる
武蔵叢話云政宗と豊く瀬の上松川の百姓

とくにいふ付上杉勢油の事を相馬は下し
かゝる上杉家の御成をさへ遣又是暖
簾前を命に付さるゝ立並ぶ政宗も幸物見え
と陣下小山村へ退き居る中政宗も一万
の少年松川へ御成を松川の陣をい
出給ふ是れ御成をいへる是れ幸見の者家切
と帰政宗小山村出陣川へ人馬を押し
掛遠物見と幸見れ御成とつかうあはる

ゆりまをさうり遠所へ潜りて敵地中
渡易敵を辰動伏仰せり又さした
有るはあはれれ動靜を察し御成は
正幸物見え居る人乃志れを例の物見え
御成の御成は推さるゝ但御成は
規格はさうりかへれ御成の内さへ
申上る御成もあはれ二徹とあはれ
御成はあはれとあはれとあはれとあはれ

小田原記云 管瀧河關東 伊賀國ハ應仁ノ頃
ホト仁木伊賀守力守護ノ國ナリシカト
モ其後代ニ衰ヘ伊賀國ニハ住シタリト
云ヘトモ所領ハワツカノ体也皆地侍共

忍物見 又稱芝見カマリ物見

小田原記云 管瀧河關東 伊賀國ハ應仁ノ頃
ホト仁木伊賀守力守護ノ國ナリシカト
モ其後代ニ衰ヘ伊賀國ニハ住シタリト
云ヘトモ所領ハワツカノ体也皆地侍共

押領ス彼地侍ト申ハ昔ヨリ服部黨是也
彼等カ一門等屬ノ族近國ノ山々浦々ニ
テ山賊海賊ヲ業トシ狩漁ヲノミ專トシ
ケル間日本今戰國ト成テ伊賀衆ト號シ
テ小田原ヲ初メ國々ニ五十人三十人呂
置テカマリ伏兵ニ用ケル 梅カチ
畧後 畧後 畧後 畧後 畧後 畧後 畧後 畧後 畧後 畧後
甲陽軍鑑云 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍 味方夜軍

時を合出と軒蓋被りしに風の大事口信
くまをれお見も如きの用と云掛かきとの時
とハ龜田やう
見聞難源云武井夕庵信長の少本陣より
う梶川の先陣ありと信をなき内難御ん
信川乃先陣と川切後ととせし
信長家と梶川海軍成とと官軍軍
如何とありて信長四意と夜
急にお見出川海軍と信長海軍

青より相のりり馬を繋ぎ至五幣を記念
し川へ流すといは是水神と宗子軍
左様ふおかけの上ハ名と不及は海軍
思し四意乃おと品今守治川の先陣と
梶川海軍といはと
奥羽永慶軍記云正宗攻大内
備前守條大内備前守
ハ其夜小濱ニ歸レハ正宗モ三十餘町引
取野陣ヲカセラレケル白石若狭守ハ敵

若夜討ニ寄ルカト芝見ヲ附テ用心スト
トモ更ニ夜討モ十カリケリ
北條五代記云 お見武者 大將軍出馬一討
陣と云ふ時と敵とみよこも先其後とて
初ニ入ハ足輕左眼目入行等ノ附ク敵
うかひあつたきハ陣ノ先と單に忍び
名付しり夜忠事遠近ある事あり
梅忍おえと人よささるれさりと書あり

此お七代一山とてり或は紫系紫のふ
隠き居く敵の混濁を窺はぬ意
初とこれおはる例の物えりハ志あり
二大しハ徳主のしめりき治る事と見
いふ事おえん 高き潜行をもししはる
いふ事おえん 高き潜行をもししはる
刈影のあつたて或はかやあえ又
其也とも草とも稜草なりハかたはら
事本の役官一はハ或人始の傍又



是書の中は、
とある。一、
武家名目抄第五十九冊

武家名目抄第五十九冊

明治十一年四月

田倉清和
奥田正志 校

